

行雲流水

No.180 令和4年4月1日発行

「仕事」をする上で大切にしたいこと

校長 寒河江 正人

I. 「1年の計は、4月にあり。最初が肝心。」

1. 何事も「**始まりのとき**」を大切にしましょう！
私たち教職員も、生徒も、保護者も、地域も。
新たな「**出会いのとき**」に感謝を！ 新たな「**スタートのとき**」に意欲を！
2. 始まりは「**新しい自分**」に生まれ変わるチャンス！
人は、「**真摯に、なりたいと願い、目指す自分**」にしかねないものだ。
3. 恐ろしいのは、最初の「ボタンの掛け違い」は、最後まで影響する。
決して、「こと」を過小評価してはならない。迅速・適切・誠実な対応を！！

II. 「教師の心が、生徒の側にある。これが肝心。」

(「**その子なりの自己実現**」を保障するための個別最適化した指導・支援)

1. どんなに優れた授業実践のつもりでも、その子のつぶやきを受けとめられなければ、そんな授業は、「一人よがりの的はずれなもの」に過ぎない。
2. どんなに優れた生徒指導のつもりでも、一人ひとりの違いこそが尊いことを理解していなければ、そんな指導は「生徒の心には決して響かない」し、「届かない」。
3. どんなに優れた部活動指導のつもりでも、その子の立場に立って、思いを巡らせなければ、それは「教師の自己満足」で、生徒にとっては「無意味な苦痛」に過ぎない。

III. 「お互いの境界線のない仕事。この心構えが肝心。」

1. 校務分掌は、教職員相互の仕事を区切って隔絶するためにあるのではない。
お互いに「**のりしろ**」をうまく意識して、「**協働**」でより良く創り上げるためにある。
2. 学級担任・教科担任は、生徒一人ひとりの一番近くにいる存在だ。
教職員・保護者に「**その子の良さを具体的に知らせることができる案内人**」である。
3. 誰かの仕事と、誰かの仕事の「**間の仕事**」を、みんなが見ている。
主体的に「**間の仕事**」を見つけ、気を利かせ、自分から進んでつないでいこう。

「おまえが未来に出会う災いは、おまえがおろそかにした過去の報いだ」

ナポレオン・ボナパルト